

「ねずみの道」の正当性

——ティモール島国境地帯の密輸に見る国家と周辺社会の関係——

森田良成*

Validity of "Mouse Trail": Relations between Nations and Peripheral Societies in Cross-Border Smuggling on Timor Island

MORITA Yoshinari*

Abstract

This paper examines illegal crossing of borders by people and things in a region of Timor bordering Indonesia. After a referendum held in 1999 to determine whether East Timor would remain part of Indonesia or become independent and a period of massive destruction and chaos wrought by Indonesian military and Timorese militias, East Timor became formally independent on the 20th of May, 2002. As a result of the independence by the Democratic Republic of Timor-Leste, an international border separating East Timor from Indonesia appeared. Today, the areas along the border are used for smuggling and illegal cross-border movement, which happen on a daily basis. The routes used to cross the border are called "mouse trails (jalan tikus)."

This paper focuses on the international border that separates the Indonesian territory of West Timor and Oecusse, Timor-Leste's isolated enclave inside Indonesian West Timor. The areas on both sides of the border for Indonesia and East Timor respectively are seen as peripheral areas least touched by development. The aim of this paper is to look into how people and things, by illegal means, move across this "porous" border beyond the control of the governments, how people presently engage in the new business pursuits, which became possible after the independence of East Timor, and how judgments regarding validity of such pursuits are made.

* 大阪大学大学院人間科学研究科: Faculty of Human Sciences, Osaka University, 1-2 Yamadaoka, Suita, Osaka, 565-0871/ morita.yoshinari@gmail.com

キーワード：密輸，国境，ねずみの道，オエクシ，西ティモール，東ティモール

Keywords: smuggling, borderland, jalan tikus, Oecusse, West Timor, East Timor

はじめに

本稿が取り上げるのは、ティモール島の国境地帯における人と物の非合法的な越境の事例である。東ティモール民主共和国は、インドネシア共和国への併合か独立かを問う 1999 年の住民投票と、その後のインドネシア国軍と民兵による大規模な破壊による混乱の時期を経て、2002 年 5 月 20 日に正式に独立を果たした。東ティモールの独立によって、ティモール島には、インドネシア領と東ティモール領を隔てる国境線が引かれることになった¹⁾。

ティモール島は、バリ島から東に連なる小スンダ列島の東端に位置する、総面積約 3 万平方キロメートルの島である。国境線は島のほぼ中央を縦断しており、東側が東ティモール民主共和国、西側がインドネシア共和国領西ティモールである。西ティモール側の北岸にはさらに 1 本の国境線が引かれ、一部の地域を囲んでいる。ここはインドネシア領に周囲を囲まれた、東ティモール領の飛び地オエクシ県である²⁾。

ティモール島の 2 本の国境線の周辺では、密貿易と非合法的な移動が日常的に行われている。この越境のために使われるルートは、現地で「ねずみの道 (ジャラン・ティクス : jalan tikus)」と呼ばれている³⁾。ねずみが堅固な壁にいつのまにか穴をあけて、人が寝静まった夜に自由に行き来するように、それぞれの理由をもつ「ねずみ (penikus⁴⁾)」たちは、インドネシアと東ティモールの国境を頻繁に行き来している。本稿で注目するのは、インドネシア領西ティモールから東ティモール領の飛び地オエクシ県を隔てている第 2 の国境線である。本稿では、この「穴だらけ」の国境を、非合法の手段によって人や物がどのように移動しているのか、東ティモール独立後にこの地域で可能になった新しい経済活動が現在どのように行われ、それをめぐる正当性がどのように語られるのかを明らかにする。この記述を通して、独立時の熱気がすでに冷めた後の段階での新興国のナショナリズムが、国家の周辺地域においてどのような形で表れるのかを考察する。なお、ここではナショナリズムという言葉を用い、自分が「国民」であるこ

- 1) 東ティモールの歴史および独立までの経緯については [Molnar 2011, 松野 2002] を参照。
- 2) オエクシの名称表記は現在のところ統一されていない。Oecussi, Oecusse, Oé-Cusse, Oecussi, Oekusi, Oecussi-Ambenu, Oekusi-Ambenu などいくつかが用いられている。オエクシの語源は、この地域の民族言語であるダワン語話者によると「甕の中の水」だという。なお、オエクシ県に接しているインドネシア領は、行政区分としては東ヌサトゥンガラ州のクパン県と北中央ティモール県である。
- 3) 同じ意味で「jalur tikus」も表記される。
- 4) 「penikus」とは、インフォーマントの 1 人が使った言葉である。「tikus (ねずみ)」という名詞に、派生語の名詞をつくる接頭辞「pe-」をさらにつけたもので、「ねずみの道を行き来する者たち」を差している。

とをかつては知らなかった人々が、他からそう呼ばれるにせよ自らがそう呼ぶにせよ「国民」であると認識し、他の「国民」とともに自らが特定の国家に帰属していると認識することを可能にするものであり、そのうえで例えば「愛国的な」行為のような新しい行為の可能性を示すものという意味で用いている。

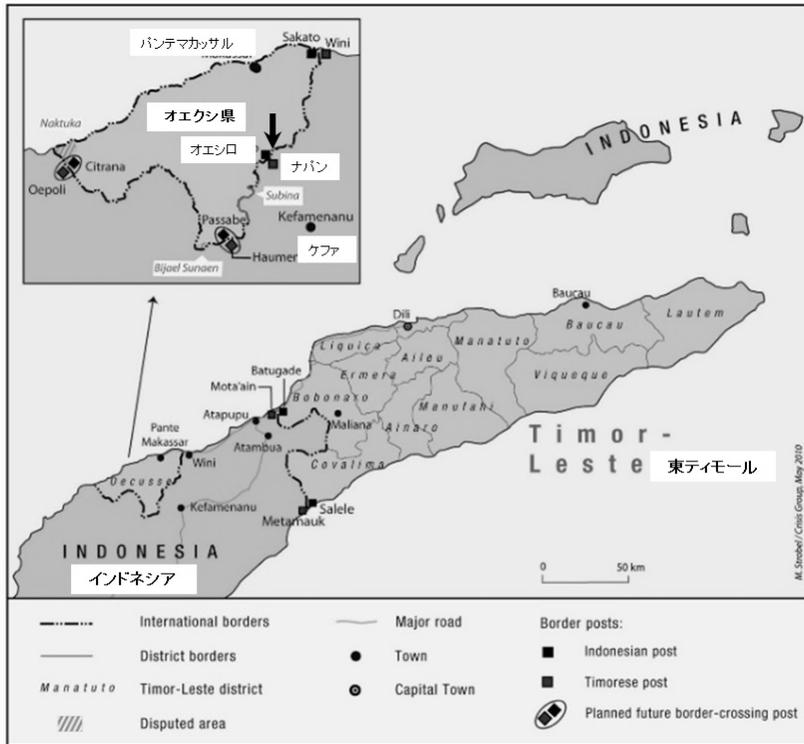


図1 東ティモールにおけるオエクシ県の位置

出典：International Crisis Group 2010。左上の囲み内の太矢印が差すのが、本稿の事例の舞台であるオエシロ村とナパン村の国境（太矢印と日本語表記のみ筆者が挿入）。

国境付近での現地調査は、2014年と2015年の2回、合計2ヶ月間行った。東ティモール領オエクシ県には、2014年8月にインドネシア側から陸路で入り、約1週間の調査を行った。その他の期間は、インドネシア側のナパン村とその周辺で行った。ここで用いる資料の多くはインドネシア側で収集しており、本稿の内容もインドネシア側についての記述が中心となる。東ティモールに関しては、独立前後から数多くのルポルタージュや研究論文が出版され、報道も盛んに行われた。それらの中には、国境の「ねずみの道」の存在に言及しているものがある

が、断片的な情報に留まっていることがほとんどである⁵⁾。島の中央の国境ではなく、オエクシ県と西ティモールを隔てる第2の国境についてとなるとなおのこと情報は限られている。本稿は、一定期間のフィールドワークの成果に基づき、オエクシと西ティモールの「ねずみの道」を実際に使って行き来している人びとの語りを記述するものである。

I オエクシ県——東ティモールの「始まり」と「終わり」の場所

1 「想像過程の共同体」——東ティモールと植民地支配の経験

21世紀最初の独立国となった東ティモールでは、ゼロからの国作りが国際社会の関心と英知を集めて行われ、国家、国民、国語が新しく想像されていく過程が注目された。インドネシアにおけるナショナリズムの誕生を分析した『想像の共同体』で知られるベネディクト・アンダーソンは、「東ティモールの想像する」と題した論考を発表している [アンダーソン 1997, Anderson 1993]。「想像の共同体」の表現に揃えるならば、東ティモールがわれわれに示しているのは「想像過程の共同体」の姿である。この章ではまず、この「想像過程」がどのような意味なのか、またそうした過程が本稿の舞台となるオエクシ県国境地帯にとってどのような意味をもつのかを説明する。

東ティモールの独立について、「500年間の外国支配の果てに、ついに独立を勝ち取った」という表現が用いられることがある。しかしこの表現は、東ティモールという国がすでに想像可能となったときに初めて可能になり、そこから過去を遡って語り直された歴史である。東ティモールの多くの人たちが、東ティモールという独立すべき国家と、そこで暮らす解放されるべき東ティモール国民を自明の存在として想像するようになったのは、インドネシアによって併合された1975年以降のことだった [Anderson 1993]。

インドネシアでは、オランダによる東インド支配の後期にあたる19世紀終わりから20世紀初めにかけて、明確な境界をもつ地理的な範囲と、そこで暮らす人々としてのインドネシア人が想像され、その時から時間を遡って「オランダによる300年の支配からの独立」が叫ばれていった。アンダーソンによると、インドネシアと東ティモールには、植民地支配とそこからの独立という「歴史的経験と神話」が共通している。1975年からのインドネシアによる東ティモール支配は30年に満たないもので、300年といわれるオランダのインドネシア支配に比べるとあまりに短い。しかしこの短い期間に、東ティモールという共同体は想像されていった。

東ティモールの「500年の外国支配」の歴史が始まるのは、ポルトガルが1515年に初めてティモール島に上陸したときである。しかしポルトガルの影響力は、ごく限られた地域と期間

5) 例えば International Care Group [2010: 10-15] など。ちなみに google を使い「jalan tikus timor」で検索すると23万件がヒットし、「smuggling timor」では29万件がヒットする。

において行使されたにすぎなかった。一方で1975年からのインドネシアによる30年に満たない支配は、行政と教育の制度の移植、インドネシア語メディアによるコミュニケーションの拡大、道路整備と組み合わせた移住政策による住民管理の強化、国軍精鋭部隊の駐屯と独立運動の弾圧などによって、ポルトガル時代よりも広く深く浸透した。住民たちは、ポルトガル時代よりもはるかに具体的な支配の経験を共有していった。この支配の経験の共有が、「そこから解放されるべきわれわれ」を想像することを可能にし、東ティモール国民と東ティモール国家を想像することを可能にしたのだとアンダーソンは結論づける。

アンダーソンは、インドネシアは東ティモールを「インドネシア 27 番目の州」として吸収し、東ティモール人をインドネシア人に同化することが、併合当時の段階では可能だったとしている。しかしインドネシアと東ティモールの関係は、かつてのオランダとインドネシアの歴史をなぞるように、宗主国と植民地、支配者と被支配者の関係の形をとった。インドネシア時代に、インドネシア大学に在籍していた東ティモール出身者の多くは、周りの様々な立場のインドネシア人から「恩知らずの東ティモール人」としての扱いを受けたという。「恩知らず」とは、かつてオランダがインドネシアのナショナリストを非難する際に、上位の文明人から劣位の野蛮人に向けて用いた言葉の典型だった。30年に満たないインドネシア併合時代において、特定の地理的な広がりや認識と支配からの解放の要求が共有されることで、東ティモールという共同体は明確な形をもつ存在として想像されていた [Anderson 1993]。

ギアーツは、第2次世界大戦後の新興国におけるナショナリズムを分析し、新興国のナショナリズムにとって植民地支配からの解放はクライマックスではなく、重要かつ必要なひとつの段階ではあるが、必然的とは言えない段階であるとしている [ギアーツ 1987: 81]。彼は、脱植民地化の歴史を大きく4つの段階に分けている。すなわち、(1) ナショナリズム運動の形成と成立の段階、(2) その勝利の段階、(3) それが国家組織に衣がえする段階、(4) 国家に再編されたナショナリズム運動が他の国との関係、およびその母胎であった無秩序社会との関係を明らかにし、その安定をはからなければならない段階である。第二と第三の段階は最も目立つものであり、世界中の耳目を集める変化が起こるのはこの時である。しかしより大きな影響力をもち、社会発展の全体的な形と方向を変えるような変化の大部分は、それほど華々しくはない第一と第四の段階で起きてきた [ギアーツ 1987: 79-83]。

現在では、インドネシアは言うに及ばず東ティモールにおいても独立の激しい熱気は収まり、ギアーツのいう第四段階の時代に入っている。本稿で注目する国境地域は、いわばインドネシアの周辺と東ティモールの周辺とが接する場所である。そこは国家の中心からは物理的にも心理的にも遠く離れ、国家による統治が届きにくい場所であるが、「われわれインドネシア人」（あるいは「われわれ東ティモール人」という認識が対象とする「彼ら東ティモール人」（あるいは「彼らインドネシア人」と隣り合わせの場所でもある。ここで重要なことは、隣り合わせの

「彼ら」が、異なる国家に帰属する国民であることはたしかだが、両国どちらの国語でもない言語を第一言語として共有し、同じ民族に帰属していると認識され、15年ほど前までは同じ国民でもあったということである。

このような状況で、村人たちは国家と自らの関係をどのような言葉で語るのだろうか。以下では、インドネシアと東ティモールという双方の国家の事情と相互の関係の力学が、中央からの統治が十分には行き届かない僻地の国境地帯でどのように働くのか、「ねずみたち」の行動と語りにおいて、国家に帰属しているという認識と、そのうえで特定の行動を正しいものとする判断がどのようにしてなされるのかを考察していく。

2 東ティモールにおけるオエクシの歴史と位置——ポルトガル時代、インドネシア時代、東ティモール時代

オエクシ県は面積 815 平方キロメートルで、東ティモール領全体の 15%を占めている。北は海に面し、三方はインドネシア領西ティモールに囲まれている。東ティモールという国家にとつてのオエクシ県は、いわば「始まり」の場所であり「終わり」の場所である。

オエクシ北岸には県庁所在地パンテマカッサルが位置している。ここから海岸沿いを西へ 4 キロメートル行ったリファウには、砂浜にポルトガル王家の紋章を象った記念碑が立ち、その基壇には「1515 年 8 月 18 日、ポルトガルこの地に上陸せり」と刻まれている。リファウは、ポルトガルがティモールに初めて上陸した地点である。ポルトガルは 1511 年にマレー半島西岸のマラッカを占領した。ティモール島は白檀の名産地として古くからジャワと中国で知られており、マラッカは 15 世紀には白檀交易の集積地となっていた。マラッカを手に入れたポルトガルは、白檀交易の利益を求めてさらに東へ進出し、原産地であるティモール島に上陸した。ポルトガルにほぼ 1 世紀遅れて、さらにオランダが島の西端に上陸した。ポルトガルとオランダは白檀をめぐる衝突し、その結果 1859 年のリスボン条約締結を経て、1916 年に両者の境界線が確定することになった。これを引き継いだのが現在の東西ティモールの国境線である。白檀の存在は、この島の運命を大きく変えたのだった [McWilliam 2005]。

インドネシア併合時代に東ティモール独立運動を展開した人々にとって、かつての支配者ポルトガルは、現支配者インドネシアに抵抗し、問題を国際社会に訴える拠り所となっていた⁶⁾。後に東ティモールが独立すると、新しい国語にはテトゥン語とポルトガル語が選ばれた。東テ

6) インドネシア支配下の東ティモール問題に国際社会が注目したのは、多数の犠牲者を出したサンタクルス事件 (1991 年 11 月 12 日) によってだった。この同じ月に、もともとはポルトガル議員団の東ティモール訪問が予定されていた。独立派は、この機会を海外に向けて主張を訴える好機ととらえて準備を進めており、外国人ジャーナリストも現地入りしていた。結果として議員団の訪問は中止となったが、サンタクルス墓地に集まった無抵抗の市民をインドネシア国軍が射撃する光景は、彼らジャーナリストによって撮影され、映像が国外に持ち出されて世界に配信された。

イモールで話されている言語は、国勢調査によれば 32 言語である。併合時代に普及が進んだインドネシア語を除外すると、テトゥン語はこれらの中で共通語として一定の役割を果たしており、国語に適していると判断された。一方のポルトガル語は、実際に使える住民はごく限られていたが、指導者層にとって思い入れの強い言語であった。独立後の東ティモール政府は、国語教育としてテトゥン語とともにポルトガル語の普及に力を入れており、またポルトガル語諸国連合 (CPLP) への加盟も果たしている。

現在の東ティモールを理解するうえで欠かせないポルトガルとのこうした関係は、ポルトガルがオエクシに到達し、そこを拠点と定めたことを出発点としている。さらに、現在の東ティモールのほぼ全域とインドネシア領西ティモールの広い地域で信仰されているカトリックも、16 世紀のリファウにおける伝道を起源としている。つまりオエクシは、東ティモールという国家にとって記念すべき「始まり」の場所なのである。

ポルトガルはティモール島上陸以後、オエクシを拠点とした。だが 1769 年に「黒いポルトガル人」勢力に敗れ、この地を追われることになる。「黒いポルトガル人」とは、ティモール島およびその北にあるフローレス島で混血し現地化した人々で、本国の決定には必ずしも従わずに自らの利害のために戦った。戦いに敗れたポルトガルはオエクシを追われ、拠点をディリに移した。ポルトガルは、後の 1916 年にオランダとの間で境界線を確定させた際にも、オエクシという記念すべき「始まりの場所」を手放しはしなかった。とはいえオエクシは、敵対するオランダ領に三方を囲まれて、新たな中心地であるディリからも隔絶された飛び地となった。ポルトガル時代の東ティモールにおいて、支配の影響が実際に及ぶ範囲は地理的にも歴史的にも限られていたが、飛び地であるオエクシにおいてはなおのことだった。

1975 年 12 月 7 日、インドネシア国軍は自国領の西ティモールから東ティモールへ全面侵攻し、「スロジャ (蓮) 作戦」を展開した。東ティモールは 27 番目の州「東ティモール州」としてインドネシアに併合されることになる。この過程でオエクシは、全面侵攻よりも 1 週間以上早い 11 月 29 日に侵攻を受けており、東ティモールで最初に占領された [Gunn 2015]。1999 年 8 月 30 日、東ティモールでインドネシアからの独立の是非を問う住民投票がついに行われた。投票によって独立が決定的となると、インドネシア国軍と民兵による暴力が東ティモールの各地の治安を急速に悪化させた。国連は、職員をいったん引き揚げさせたのち、多国籍軍による軍事介入を決定する。同年 9 月 20 日に INTERFET (International Force for East Timor, 東ティモール国際軍) の第一陣がディリに到着し、治安の回復に当たった。オエクシに INTERFET が到着したのは、ディリ到着から 1 ヶ月が過ぎた 10 月 22 日のことであり、東ティモールで最後だった。つまりオエクシは、東ティモールで最初にインドネシアに占領され、最後にインドネシアから解放された場所だといえる。

このように見たとき、オエクシはまず、今日の東ティモールの政治的、経済的、文化的な特

徴（ポルトガルとの様々な分野での関係、国語へのポルトガル語採用、カトリックの信仰）の「始まり」の場所だといえる。それと同時に、ポルトガルが拠点をディリに移して以降は、ポルトガル領時代、インドネシア領時代、独立を経てからの東ティモール領時代のいずれにおいても、中心からのアクセスが不便な周辺の土地であり、国家による統治と開発の恩恵が届きにくい「終わり」の場所であり続けてきた。独立直前の 2001 年の統計によると、オエクシにおける識字率は 31 パーセントで、東ティモールの他の領域のほぼ半分の数値だった。2005 年に東ティモールとインドネシアの間で陸上の国境線についての暫定合意が成立したとき、2 つの地点のみが保留扱いとされたが、それらが位置するのはオエクシと西ティモールとの国境線上だった。この 2 つの地点について、両国は現在も合意に達していない⁷⁾。

一方でオエクシは現在、国家規模の経済特区構想の舞台となっている。ZEESM (Zonas Especiais de Economia Social de Mercado de Timor-Leste) という「社会的・経済的な持続的発展を目指すパイロットプロジェクト」が、2014 年からオエクシ（および首都ディリの対岸にあるアタウロ島）で進行中である。東ティモール政府は飛び地としての特殊な事情をもつオエクシ県に対してまったく無関心だったわけではなく、特別自治や特区建設を求める声が独立当初から上がってはいた [Holthouse and Grenfell 2007]。ZEESM は、ポルトガルをはじめ海外からの投資を積極的に呼び込みながら、20 年をかけて経済開発の拠点を築き上げるというプロジェクトであり、「第 2 のシンガポールの建設」を目指している。オエクシとその周りの住民からは、期待を寄せる意見もあれば、オエクシのような僻地にはあまりにも不相応で実現は難しいだろうという冷ややかな声も聞かれ、ディリに拠点を置く NGO は住民の生活を無視していると批判している⁸⁾。ともあれ、このプロジェクトが計画に近い形で進行していくならば、オエクシは新しい時代を迎えた東ティモールにおいて「始まりの場所」に返り咲くことになるだろう。

II オエクシ—西ティモール間の「ねずみの道」

1 国境の出現がもたらした変化

現在の東ティモール領オエクシ県とインドネシア領西ティモールは、300 キロメートルの国境線で隔てられている。この線上で「ねずみの道」を用いた人と物の往来が盛んなのが、オエ

7) 2015 年 8 月の報道によれば、インドネシアのジョコ・ウィドド大統領と東ティモールのルイ・マリア・デ・アラウジョ首相のジャカルタでの会談（東ティモール前首相であり元大統領であるシャナナ・グスマンも同席）において、この 2 地点の国境問題を「2015 年内に解決する」ことが確認された。しかし 2016 年 2 月現在、未解決のままである。

8) 東ティモールの首都ディリに拠点を置く NGO の La'o Hamutuk は、ウェブサイトには詳しいレポートを掲載し批判している。

クシ県オエシロ村とインドネシア領北中央ティモール県ナパン村が接する場所である（前掲の図1参照）。

オエクシ県から最も近いインドネシア側の都市ケファ（北中央ティモール県の中心地）のターミナルでは、乗り合いバスの車掌が「バタス、バタス！」と行き先を告げて乗客を集めている。「バタス」とは「国境」のことである。バスに乗って町を離れ、緩やかな登り道を20キロメートルほど行くと、国境の村ナパンに至る。バスはインドネシア領から出ることなく、国境の検問所の手前で折り返してケファへと戻る。道路自体は、検問所を越えてそのまま東ティモール領オエクシへ続いている。かつて国境が州境だったころ、バスはこの境界をそのまま通過して東ティモール州オエクシ県に入っていた。県内最大規模のトノ市場を経由し、海岸にある県の中心地パンテマカッサルまで乗客と物資を運んでいた。

オエクシ県内のほとんどは農村で、目立った商品作物の栽培も見られず、パンテマカッサルにしてもごく小さな町で大きな産業はなかった。インドネシア時代には、オエクシ県で必要とされる生活物資は、パンテマカッサルから最もアクセスのよいケファの町（距離は約50キロメートル）から主に入ってきていた。東ティモール州の中心地ディリとの間も、北岸の道路を通して往来ができた。また、ケファに加えてアタンブア（ベル県の中心都市。パンテマカッサルからは80キロメートル）へのアクセスも開かれていた。オエクシの経済は、県外のこれらの町との結びつきによって成立していた。人々の暮らしは、県境であり州境である線を越えて入ってくる物資に支えられていた。また県境付近の農村では、線の向こう側に農地を持ち、毎日のように行き来する者がめずらしくなかった。線の向こうには親族が暮らしており、結婚式や葬式、慣習（adat）に基づく儀礼のために、多くの人々がたびたび移動していた。

しかし、1999年に東ティモールの独立が決定すると、パンテマカッサルと周囲の町を結ぶルートは、州境ではなく国境をまたぐものとなった。身近な存在だったケファとアタンブアは隣国の都市となり、オエクシへの物資の輸送は隣国への輸出として扱われ、関税や検疫などの煩雑な手続きを伴うものになった。オエクシと東ティモールの他の領域との陸路での行き来も、いったん国外へ出てインドネシア領を通過しなければならなくなった。2003年には、国境を越える際にパスポートとビザを携行することが義務づけられた。農民がわずかな距離を移動して自分の農地に行くため、あるいは親族を訪問するために、パスポートとビザが必要ということになったのである。

オエクシ住民にとって、パスポートの取得は大きな負担である。手続きのためには、まず費用と時間を負担してディリに行かなければならない。ディリに行くには、陸路であればインドネシア領を通過しなければならない。空路は現在、役人や国際機関の職員などが職務上の必要

に応じて小型飛行機を使っているだけで、一般的な移動手段ではない⁹⁾。海路は、1週間に2便のフェリーが、オエクシとディリを12時間で結ぶのみである。パスポートを取得したとしても、インドネシア側へ移動するには、そのたびにビザを取得しなければならない。これには35USドルという大金が必要である。一方のインドネシア側の住民にとっては、パスポートの手続きを地元の役所でできるので負担はやや軽い。しかしオエクシという隣国の領土に入るにはやはりビザの取得が必要であり、30USドルを支払わなければならない [Holthouse and Grenfell 2007]。

独立によって生じたオエクシ県をめぐるこれらの問題を、東ティモール政府は認識していた。2002年に定められた東ティモール共和国憲法では、地方分権を定めた第5項と、行政組織について定めた第71項で、オエクシには特別自治および経済分野での特例が認められるべきだと明記された。飛び地であるオエクシには特別な配慮が必要であり、実情に即した越境の仕組みを作るとともに、東ティモールとインドネシアの合同の市場を設置するべきだという意見が、独立当初から上がっていた [Holthouse and Grenfell 2007]。しかしオエクシは、国の歴史の「始まりの場所」とはいえ、目立った資源や産業をもたない低開発の周辺地域であり、ポルトガル時代とインドネシア時代を通して最低限のインフラ整備すら十分には行われなかった、物理的にも心情的にも「終わりの場所」だった。一方のインドネシアにとっての西ティモールは、広大な領土における東の辺境の地であった。隣国の辺境オエクシに接するこの地域にインドネシア政府の特別な関心が払われたのは、併合直前と独立前後に緊張が高まった一時期のみだった。こうしたことから、オエクシの特別な事情を考慮した具体的な対策は十分にはなされなかった。

東ティモールの独立とともに出現した国境によって、生活物資の輸送ルートは変更を余儀なくされ、人々の移動は大きく制限されることになった。しかし現在、国境付近の住民たちは、許可を持たないまま日常的に国境を越え、様々な物資を運んでいる。国境を「穴だらけ」にして、人や物の盛んな行き来を可能にしているのが「ねずみの道」なのである。

2 「ねずみの道」成立の経緯と現在

「ねずみの道 (jalan tikus)」というインドネシア語の表現は、一般的には「小道」あるいは「抜け道」を意味する。通常のあるいは正当なルートを使わずに、目的地により早く、たやすく到達するための近道、間道のことを差す。国境についてであれば、本来ならば二つの国を明確に隔て、出入国が厳重に管理されるはずの国境という壁にいつのまにか穴をあけて、ひそか

9) 住民に急病人が出た場合など、この飛行機の発着にちょうどタイミングが合い、定員に余裕があれば便乗できる。

に、しかし活発にそこを行き来するさまを表す言葉となる¹⁰⁾。

東ティモール独立によって、オエクシ県は周囲を海と隣国インドネシアに囲まれた飛び地となり、本国の他の地域からも、インドネシア側の最寄りの都市からも国境で隔てられることになった。オエクシ県の住民のほとんどは農民であり、一部の水田地帯で稲作を行うほかは、主食であるトウモロコシなどの自給用作物の栽培を中心とした農業によって生活している。現地で収穫される農作物以外の食品、調理油、調味料、石鹸、衣服、燃料といった生活に必要な物資のほとんどは、地域の外から運んで来なければならない。しかし独立以降、東ティモール本土からの物資は十分には入らず、インドネシア側の業者が正式な手続きを経て運ぶ物資も、物量と価格ともに人々の必要を満たしていない。

インドネシアは、1976年に東ティモールの併合を宣言した。「東ティモール州」への立ち入りは、1989年に他州なみに開放していく方針に転換されるまで、外国人はもとよりインドネシア人にも制限された。しかしナパン村およびその周辺での聞き取りでは、オエクシとの行き来におけるこの時期の変化が語られたことはなかった。住民の記憶によれば、インドネシア併合以前のポルトガル時代から、オエクシとナパンの通行管理は不十分な形でしか行われておらず、人々は日常的に境界を行き来していたということである。よって制限緩和による特別な変化は、おそらくなかったのだろう。

ポルトガル領、インドネシア領、東ティモール領のそれぞれの時代に共通して、オエクシと周囲との境界線の管理は十分には行われてこなかった。その背景には、この地域への中央からの関心の低さのほかにも、2つの点を挙げることができる。ひとつは地形である。オエクシは川や山脈などで明確に隔てられているわけではなく、ナパンとオエシロの間であれば徒歩で容易に越えることが可能である。現在では、ナパンとオエシロを結ぶ道路には、立派なゲートと検問所が設置され、道路に沿って入国管理局、税関、検疫所といった関係施設が並んでいる。しかし道路から少し離れてしまえば、国境を示す碑がぼつぼつと一定の間隔で立っただけで、通行を遮るものは何もない。自動車が通行することはできないが、荷物を運ぶ人や手押し車は、容易に国境を越えることができる。

もうひとつの背景は、言語および文化的な環境が境界の両側で共通していることである。オエクシ内で話されている民族言語はダワン語である。ダワン語はアトニ・メトという民族集団によって用いられる言語であり、多言語が複雑に分布している東ティモールにおける地方語の一つで、国内でほぼオエクシのみで用いられている。しかしティモール島全体で見たとときのダワン語は、オエクシおよびインドネシア領西ティモールの大部分で第一言語として用いられている圧倒的多数派の言語である(図2を参照)。東ティモールでは現在までに、ポルトガル領、

10) ボルネオ島(カリマンタン島)におけるマレーシア-インドネシア間の国境社会とねずみの道の密輸の事例については、石川[2008]を参照。

インドネシア領、東ティモール領といった帰属の変化が起こり、国語もそれに伴って変わってきた。しかし国語の変化は、海岸の町パンテマカッサルでの行政や教育の場面には影響が及んだものの、大部分のオエクシ住民の日常会話には大きな変化をもたらさなかった。境界の両側で、日常会話はともにダワン語でなされており、境界をまたいだやりとりも当然ダワン語で行われ続けてきた。独立とともに、東ティモールの国語はテトゥン語とポルトガル語に決まった。独立から 10 年以上が経った現在、東ティモールのほとんどの地域でポルトガル語教育の成果が疑問視されている一方、テトゥン語の国語としての地位は順調に固まりつつあるといわれている。そうした中でオエクシは、テトゥン語の普及が国内で最も遅れている地域として問題視されている。オエクシでは、県の中心地であるパンテマカッサル以外ではテトゥン語を話す機会がほとんどなく、ダワン語の使用頻度が圧倒的に多いことを考えると、これは仕方のないことだといえる。

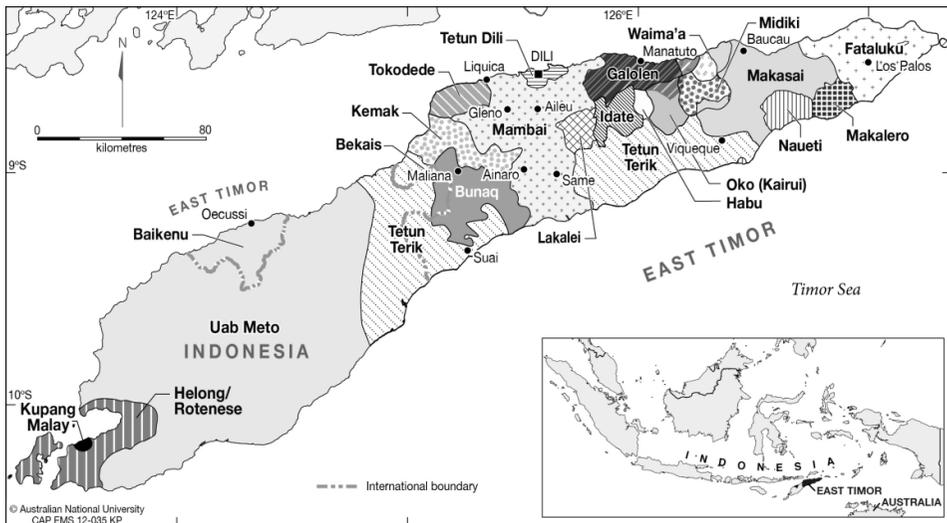


図 2 ティモール島の言語状況およびダワン語の分布

出典：CartoGIS, College of Asia and the Pacific, The Australian National University.

西ティモールの広い領域で話されている「ウアブ・メト (Uab Meto)」と、オエクシで話されている「バイケヌ (Baikenu)」とは、ともに民族集団アトニ・メトが話す「ダワン語」のことである。この地図でも、両者は同じパターンで示されている。また、東ティモール独立後に国語として整備され、主に首都ディリで用いられている「テトゥン・ディリ (Tetun Dili)」が、それ以外のテトゥン語である「テトゥン・テリック (Tetun Terik)」と区別して異なるパターンで示されていることも、東ティモールの言語状況を理解するうえで重要である。

このように、オエクシを囲む境界線がもつ意味は、国家レベルでは時代とともに大きく変わってきたが、境界の両側で暮らす人々の生活は、地理的、言語的、文化的に連続したままであり、ごく当たり前に頻繁な往来が続いてきた。境界の向こう側にある自分の農地に作業に出かけたり、朝に牛を連れて行って草を食わせて夕方に連れて帰ったり、結婚式や葬式のため、「ルマ・アダット (rumah adat, 慣習家屋)」に親族が集まって祖霊に祈るために境界を越えることは、生活の一部だった。調査中にナパン村を案内してくれた男性は、「境界のこちら側と向こう側の人間は、顔つきも、言語も、慣習 (adat) も、布に描かれるモチーフも、すべてが同じ。違うのは行政だけだ」とたびたび語った。オエクシの多くの住民にとって、国境の向こう側で暮らす「彼らインドネシア人」は、オエクシ以外の地域で暮らす「われわれ東ティモール人」よりも、言語や慣習などはるかに多くのものが「同じ」である。同時に、オエクシ周辺のインドネシア側住民にとってのオエクシの人々は、国籍はたしかに異なるが、「われわれ」とは異なる「彼ら」として認識することがしばしば困難な存在なのである¹¹⁾。

東ティモールの独立によって国境ができ、人と物の移動はたしかに制限されることになった。しかし、「顔つきも、言語も、慣習も、布に描かれるモチーフも、すべてが同じ」状況で、国境をまたぐ人と物の移動を管理下におき制限することは容易ではない。実際、こうした移動は独立後も途絶えることがなく、ある意味でむしろ活発化したといえる。それを可能にしたのがねずみの道である。

実際の国境の管理は甘く、また国境の両側では言語や慣習など多くのものが共通しており、たやすく行き来されている。それでも現在のオエクシはたしかに東ティモール領の一部であり、インドネシア側の住民にとってのそこは外国である。そのことが明確に表れるのが、通貨の違いである。東ティモールは現在、独自の自国通貨を作らずに US ドルをそのまま使用する通貨代替を選択している¹²⁾。インドネシア側の農民たちにとって、このことはきわめて重要である。国境の出現がインドネシア側の人々にもたらした決定的な変化とは、オエクシで不足がちになった生活物資を売ることによって現金を手に入れる機会が生まれたことであり、さらにそうすることで手に入る現金が外貨であること、しかもインドネシアのルピアよりも「はるかに強い (価値がある)」と好まれる US ドルだということだった。この US ドルを手に入れるためには、ねずみの道を通り、法を犯して商品をオエクシに運び出す必要がある。こうしてナパンーオエシロ間のねずみの道を通して、インドネシアからオエクシへは様々な商品が出て行き、オエクシか

11) オエクシを含むティモール島西側の広い地域に暮らしているアトニ・メトの慣習およびその歴史と政治体系について、代表的な研究に [Schulte-Nordholt 1971] がある。

12) 1 ドル未満については独自の硬貨を発行している。単位は「センターボ (Centavos)」。

らインドネシアへは US ドルが入ってくるようになった¹³⁾。調査を行った 2015 年 8 月は、インドネシアでは深刻なルピア安が話題になっていた。西ティモールの町では、「ルピアの価値が下がって大変だ」と不景気を嘆き、ジョコ大統領の経済政策を批判する声が聞かれた。しかしオエクシ手前の農村で同じ時期に聞かれた声は違っていた。彼らは「ドルの価値が上がって大変だ」と興奮気味に話っていた。US ドルをインドネシア側で両替したときに手にするルピアの金額が、大幅に増えたのである。

国境をまたいだ両側で同じ言語が用いられ、さらに親族や知人のネットワークが広がっているため、取引相手は容易に見つかり、コミュニケーションもスムーズに行われる。インドネシア領西ティモール側では、この数年で農村部でも携帯電話が急速に普及した。番号開通の手続きが簡単で、通話料金がプリペイド式で維持費用も安く、端末は中古品を含めて安価で入手できるため、携帯電話は村人たちにとって当たり前の生活用品になっている。当然ねずみの道でのやりとりにも活用されているが、中でも便利だと人気が高いモデルは、2つの SIM カードを1つの端末で使い分けができるデュアル SIM 端末である。彼らはこの端末に、インドネシアの通信会社と東ティモールの通信会社の SIM カードを1枚ずつ入れて、2社の電話番号を使い分けている。国境付近ではどちらの通信会社の電波も届いており、どちらの通信網も利用することができる。インドネシア側から、ふだん使っているインドネシアの電話番号でオエクシの相手（東ティモールの電話番号を使用している）に電話をかけると、国際通話になるので料金は高くなる。よってこうした時には、東ティモールの番号から電話をかけることで、国内通話扱いにするのである。東ティモールの通信会社の SIM カードは、オエクシの取引相手が準備するか、インドネシア側に持ち込んで販売している者から購入することができる。プリペイド式の通話料の入金、オエクシ側にいる取引相手が自分に代わってやってくれる。

こうしたねずみの道の現状を、両国政府はただ放置しているわけではない。2012 年になって、越境のための新しい制度が導入された。東ティモール側で「Passe de Fronteira」、インドネシア側で「Pas Lintas Batas」（PLB と略される）という「越境許可証」を用いた制度である¹⁴⁾。これは、国境周辺に暮らす住民の生活事情に合わせて、「家族の用事」「伝統的慣習に関する用事」のための移動の便宜を図り、簡略化された手続きで出入国を許可する制度である。国境に接する行政区域の住民であれば、許可証の発行を申請することができる。発行までのプロセスはパスポートよりもはるかに簡単で、中央の役所に出向く必要もなく、かかる費用も安い。申請が認められると、顔写真や署名などが入ったパスポートのような形式の「越境許可証」が発行される。国境を越える際には入国管理局でこれを提示し、押印を受ければ、ビザなしで相手

13) 逆にオエクシからインドネシア側に入ってくる物資の品目はごく限られており、主なものはロンタル椰子から作られた酒である。ロンタル椰子は国境近くのインドネシア側では生えておらず、東ティモール独立以前からオエクシで作られた酒が好まれて消費されてきた。

14) 英語名称はともに「Border Crossing Pass」。

国に入国し、許可された範囲内で10日間まで過ごせる。申請すれば、期間の延長もできる。越境許可証自体は1年間有効で、更新の手続きも簡単なものになっている。

この新しい制度は、国境周辺の住民の生活に一定の配慮を示したものだ。しかし住民たちにとっては重要な欠点があった。これはあくまで「家族の用事」「伝統的慣習に関する用事」に限った措置であり、国境をまたいだ商業活動を認めていないのである。オエクシできわめて需要が高いのは、本土からの流入が乏しい燃料（ガソリン、軽油、灯油）であり、これはインドネシア側の住民にとって最も主要な「商品」である。しかし、価格安定のために政府が補助金を出している燃料（および肥料も）は、国外に持ち出して販売することを特に厳しく禁じられている。新しく始まった越境許可証の制度も、この燃料の売買はもちろん、国境を越えた商品のやり取りを相変わらずただ禁じるだけだった。国境そばのインドネシア側（インドネシア側検問所から国境線までの間）では毎月最終金曜日に両国合同の市場が開催され、ここでは商業活動が例外的に認められることになったが、燃料の売買はやはり禁止されたままだ。越境許可証制度の導入は、独立からすでに10年が経過した2012年になって行われたが、既にこのときにはねずみの道を使って燃料をオエクシに密輸し、流通させる仕組みができあがっていた。新しい制度は、これに代わる仕組みを何も提供しなかったのである。

越境許可証による通行は、国境の向こう側で過ごせる期間を10日以内と定め、移動できる範囲を国境に接する区域のみとしている。インドネシア側の住民がこれを使って通行し滞在できる東ティモール領は、オエクシ県内のみということになる。この制限があるために、住民はしばしば越境許可証の利用を避けている。たとえばインドネシア側の村人が、娘が結婚して東ティモール首都のディリで暮らしており、出産を終えたばかりなので会いにいき、孫と娘の世話をしながらしばらく過ごしたいとする。こういう場合、彼女は越境許可証を使わない。ねずみの道を通ってオエクシに入り、港でフェリーに乗ってディリへ移動すれば、好きなだけの時間をディリで過ごし、また帰ってこられるのである。オエクシの若者がインドネシア側の親族を頼って、あるいはよりよい教育環境を求めてインドネシア側で生活して学校に通うという場合も、ねずみの道が利用される。病院で治療を受けるために、オエクシからケファへねずみの道を通って病人が運ばれることがある。病院での治療の甲斐もなくそのまま亡くなってしまうと、亡骸はやはりねずみの道を通って、オエクシの親族のもとに帰される。そもそも、いくらパスポートよりも手続きが簡略化されているとはいえ、日常的な農地への移動のためにわざわざ越境許可証を準備し携帯するのはやはり面倒で、非現実的ある。こうして2012年に導入された越境許可証の制度は、ねずみの道の仕組みに代わるものにはなりえなかった。現在では住民たちは、必要に応じて2つの方法を使い分けるようになっている。

III 「公然の秘密」をめぐるそれぞれの正当性

1 「ねずみの道」のルール

ナパンーオエシロ間のねずみの道は、「右セクター」「中央セクター」「GP（グヌン・プティ）セクター」に大きく分かれている。ねずみの道はこの3つの場所で、1週間に3回（水曜、金曜、日曜）、夜間に限って「開く」。

「ねずみたち」はこの時に合わせて、ケファの町から国境手前のそれぞれの場所に燃料や肥料などを運び、一定のまとまった量を準備しておかなければならない。当然であるが、ねずみの道を利用した密輸と越境は違法行為であり、「ねずみたち」もそのことをもちろん認識している。町から村までの輸送の際には、警察による取り締まりを警戒する。国境越えは、夜の闇の中で最低限の明かりだけを灯し、できるだけ目立たないようにして行く。しかし彼らは、少なくとも3つのセクターで1週間に3回行われる取引に限っては「resmi（公式のもの）」であり、「国境警備の警察と軍には話を通っており、すでに許可を得ている。彼らも理解を示している」という。彼らは、ねずみの道の密輸を「本来はいけないことだが、もはや公然の秘密（*rahasia umum*）だ」と語る。

ねずみの道が開く夜、国境越えの様子をビデオカメラで撮影してもよいかと私が尋ねると、「顔は映さないでほしい」と言う者が数名いた。しかしほとんどの場面では、インタビューとビデオ撮影はこちらが想像していた以上にスムーズに進んだ。初対面の外国人である私に対して、彼らは具体的な内容を詳しく語り、仕事でも撮影に応じてくれた。これは、「ねずみたち」の多くに信頼されている現地の男性による仲介があったからである。しかしそれを差し引いても、「違法」「密輸」といった言葉で描写されるはずのことは行い、それについて語る彼らの様子からは、罪を犯しているという後ろめたさを感じられなかった。こうした印象は、オエクシ県内で聞き取りをしたときも同じだった。市場のそばの道路脇で、合計200リットルほどのガソリンをポリタンクに小分けにして、道をゆくバイクに売っている男性がいた。話しかけてみると、彼もやはり、ガソリンがケファから国境を越えてどのようにして運ばれてきたのかを、終始リラックスした表情で詳しく説明してくれた¹⁵⁾。

オエクシの人々にとって、ねずみの道の物流は日常生活を維持するためにきわめて重要なものになっている。独立から現在までには、インドネシア側からの物流が一時的に途絶え、オエクシでガソリンが品薄となり値段が大きく上がったこともあった。たとえばインドネシアの独立記念日である8月17日前後には、インドネシア側の村と町では休日の雰囲気が続く。この

15) そもそもインドネシアでも東ティモールでも、ガソリンを無許可で路上で販売すること自体は各地で当たり前に行われている。ガソリンスタンドなどで手に入れたガソリンを空き瓶に詰め直し、一定の利益を上乗せして路上で販売するのである。

時期には「ねずみたち」の動きも鈍くなり、物流があきらかに減ってしまい、オエクシで燃料不足が起こったという。ねずみの道を使った密輸は違法行為だが、この物流がもし突然途絶えたならば、オエクシ側の人々の生活は大きな混乱に陥るだろう。オエクシにおいて、ねずみの道の物流は人々の暮らしを支えており、かつその取引に参加する者たちに現金を稼ぐ機会を生み出している。

インドネシア側の人々にとって、ねずみの道を使って物資を運び出すことは、現金を手に入れる重要な手段である。国境近くに住む村人で、安定した収入を得て生活している者はごくわずかであり、ほとんどは農民で、収入は小さく不安定である。彼らが現金を得ようとするならばまず農作物を売ることになるが、商品作物はほとんど栽培されていないので、機会はごく限られる。一定の現金収入を望む者たちは、村を離れ、最も近い町であるケファヤ、島の西端にある州都クパンに行くことになる。しかしそれらの町でもこれといって大きな産業はなく、彼らの多くにも特別な技能や経歴があるわけではないので、大した収入は期待できない。満足できなければ、さらに遠くの大都市やプランテーション、あるいはマレーシアやシンガポールなどの外国へ出稼ぎに行くしかない。こうした状況が、国境が出現したことで変わった。彼らは村にいながら、町で働くよりもはるかに多くの現金を、しかも外貨を稼ぐ機会を得た。国境の両側の住民の間で、ねずみの道をめぐる利害はこのように一致している。

ねずみの道をめぐる利害は、国境両側の住民の間だけでなく、国境の警備に当たる軍人や警察官とも重なっている。現地に駐在している軍人と警察官は、ねずみの道の存在を認識しており、その現状をかなり把握している。しかし「ねずみたち」によれば、彼らは「ねずみたち」には他に現金収入を得る手段がなく、国家に反逆する意図もないことをよく理解しており、この土地のことを「わかっている¹⁶⁾」という。「ねずみたち」は、こうした「わかっている」人物たちの「コーディネーター (koordinator)」に定期的に「届出 (lapor)」をして、一定の日時と場所での行き来を「公式のもの」と認めてもらっている。届出の際には、扱う品目と物量に応じた現金と、燃料や酒など一定量の現物を持参することになっている。「ねずみたち」は、「軍人や警官にも事情があるのだから」と語る。「このあたりで勤務する警官には収入源 (sumbur hasil) がない。町の警官は『タバコ代』が欲しくなったら道路に立って、無免許運転を取り締まればよい。適当にバイクを捕まえて、見逃してやる代わりに『タバコ代』を受け取ることができる。でもこの村ではそれはできない。」軍人も、木材や鉱産物などに恵まれた駐屯地であれば、それらを利用したサイドビジネスで副収入を得られるだろう。しかしこの場所ではそうしたものは期待できず、副収入のほとんどはねずみの道を認めることで得られている

16) ここに記述した情報の多くは、「ねずみたち」の語りに基づいている。調査においては国境警備に実際にあたっている軍人と警察官とも「ねずみの道」について直接話をしたが、彼らもまた、「ねずみたち」を見逃している自らの行為の正当性を同様の論理で説明していた。「ねずみたち」と管理する立場の者たちとのさらに微妙な関係については、別稿で詳しく述べたい。

17)。彼らは「届出」を受けた以上は、物資の品目と量、場所と時間が「公式」と認められた範囲に収まっている限り、「ねずみたち」を必要以上に締め付けたり、むやみに金品を要求したりはしないことになっている。

国境ではしばしば大掛かりな密輸阻止作戦が行われ、その成果は現地の新聞で大きく報じられる。そうした記事には、作戦の成功を物語る証拠として、燃料の入ったドラム缶やポリタンクがずらりと並べられた写真が添えられる。これらは一見したところでは作戦の成功を物語る押収品だが、村人に言わせるとそうではない。それは彼らが「届けたもの」だという。「ねずみたち」は「コーディネーター」にお金とともに現物を届けている。密輸阻止作戦や中央からの視察があった場合に、国境勤務の軍人や警察官はそれを使う。作戦による押収品として、あるいは日ごろから取締りを行っていることの証拠として、それを上役やメディアに示すのである。またそもそも密輸阻止作戦は、不発に終わることも多い。なぜなら作戦の情報は、「コーディネーター」を通じて「ねずみたち」に予め伝わるからだ。「今夜は道が開かない」という連絡は、携帯電話を通じて「ねずみたち」の間ですぐに広がる。情報を受け取ると、「ねずみたち」は警備が緩む時間を根気よく待ったうえで、ふだんよりもだいぶ遅い時間に仕事を開始するか、あるいはその日は諦めて機会を改めるなど、適切に対処する。これがねずみの道のルールなのである。

歴史や文化的背景など様々な事情をもつ国境周辺の社会に対して、両政府によるルールの作成と運用はあまりに遅く、内容も十分ではなかった。それよりも早くから、「ねずみたち」は「コーディネーター」と別のルールを作り上げ、洗練させていった。これに従って行われることは、違法ではあっても「安全なもの (aman)」であり「公式のもの (resmi)」だとされる。「ねずみたち」とそれを取り締まる立場の者たちは、利害を調整しながらそれなりに共存し、一定の安定した関係を築いている。こうした関係があるので、オエクシで購入した酒の数十リットル程度ならば、週3回の夜を待つまでもなく、日中に検問所のすぐ後ろを迂回するだけでごく簡単にインドネシア側まで運ばれている。

2 否定形で語られる「ナショナリズム」

時には「ねずみたち」から逮捕者が出る。拘留され、罰金を払わされ、燃料などの大切な商品はおろか、それらを町から運ぶのに必要な車両を押収されることもある。こうしたことは、「わかっていない」軍人や警察官によって行われる。彼らは新しく赴任してきたばかりか、中央からの視察や特別な作戦のために一時的にやってきたか、あるいはケファアの町とその周りで

17) こうした事情を反映してか、2013年には国境警備の任務についている警察官に対して給与の大幅な増額が図られたという (POS KUPANG 2012年12月23日の記事)。また、彼らは自動車やバイクなどの密輸を自ら行うことでも副収入を得ている。

の勤務が主なので村の事情を把握していないかである。あるいはそうでなければ、「コーディネーター」との調整不足が原因である。つまり、「コーディネーター」から通常よりも多くを支払うように求められた「ねずみたち」が、それを不当だとして従わずに、関係がこじれたということである。商品を押収されることを、「ねずみたち」の1人は、苦勞して集めたものを「横取りされた」「盗まれた (dicuri)」と表現して非難する。ルールに従っているにもかかわらず、要求をつり上げたり、捕まえて品物を没収したりするのは大きな「間違い」なのである。

「自分たちは何も金持ちになろうとしているのではない。生活していくために必要なお金を稼いでいるだけだ。」「子どもを学校にやらなければならないし、病気の夫の治療費を稼がなければならない。」「他の方法で稼げといわれても、この村でいったいどうやったらお金を稼げるのだ。」このような言葉で、「ねずみたち」は自分たちの正当性を主張する。「ねずみたち」とは違い、政府からの正式な輸出許可を取得し、大型車両に大量の品物を積み込んで、検問、入管、税関を通過してオエクシへ運んでいる業者もいる。こうしたことができるのは、ケファの町に暮らし、以前からいくつもの大きな店舗を経営しているような、すでに経済的に十分に恵まれた人々である。「ねずみたち」は、「町の輸出業者のようなやり方は、自分たちにはとてもできない」、「彼らのような大きな稼ぎは無理なので、関税をまともに払っていたら利益が無くなってしまう」と語り、自分たちにはねずみの道の他には方法がないのだと語る。

「ねずみたち」が自らの正当性をこのように主張する際に、忘れずに強調することが、「自分たちがやっていることに政治的な意味はなく、ただ生活するためにお金を稼いでいる」、「国家に抵抗 (protes) する意図はまったくない」「損害を与えるつもりはない」ということである。彼らはここで、自らがよきインドネシア国民であり、国家に忠誠を誓っているということを、「国家に抵抗する意図はない」という否定形で語る。彼らが扱っているのは燃料や肥料などの一般的な商品であり、ティモール島の中央を縦断する国境でしばしば問題になるような麻薬や武器ではない。ごく一般的な商品を生活のために売っているにすぎず、たしかに仕方なく法を犯してはいるが、国家に対する反逆や抵抗、背信行為を意図するものではまったくないし、自分たちがそうした犯罪者と同列に扱われてはならないというのが、彼らが強調していることである。

インドネシアでは、政治や経済のさまざまなレベルで、汚職、賄賂、縁故主義が蔓延しているといわれる。規則はしばしばあつてないようなもので、それぞれのケースの状況と関係者の利害によって大胆に調整される。しかし誰もが越えてはならない最後の一线に位置づけられているのが、「国家への忠誠」である。「国家のために」として政治家や軍人は様々な行為を正当化しようとするし、独立記念日前後には大企業が愛国心を鼓舞する内容の特別なテレビCMを打つ。最大規模の「民兵組織」といわれるパンチャシラ青年団は、国是である「パンチャシラ」を組織名に冠し、かつて共産党員の疑いのかかった人々を「国家のために」殺害し、その遺族

による名誉回復のための活動を現在も妨害している¹⁸⁾。逆にいえば、「国家への忠誠」を示すことができれば、規則を違反した行為の正当性を確保しておくことが可能なのである。「ねずみたち」の正当性の語りにおいて、「国家に抵抗する意図がない」とことさらに強調されるのはこのためである。彼らは国が定めた法律を破り、国境という国家の外形に穴を開けている。しかしそのような行為を通して、彼らは否定形ではあるが国家への忠誠をたしかに語り、国家に帰属していることを表明するのである。「国家への忠誠」を宣言しておくことは、「反逆に対する制裁」を避けるために「ねずみたち」にとって重要なことである。彼らは国家が振るう暴力の恐ろしさと、条件が揃ったときにはそれがたしかに自分たちの村にまで及びうるものであることをよく知っている。それはまさに、東ティモールの独立前後に彼らが経験したことである。

彼らのこの宣言は、「ねずみたち」を取り締まる側の軍と警察にとっても重要である。彼らは「ねずみたち」が扱う品物が、麻薬や武器のようにそれ自体で危険で違法性の高いものではなく、ガソリンや肥料といった単なる生活用品であるということを確認でき、それに加えて彼らの宣言から「国家に抵抗する意図がない」ことも確認できた。「ねずみたち」には他に現金を稼ぐ方法がないということもよくわかった。ここまでのことがわかった以上、「ねずみたち」の違法行為を「人の道 (kemanusiaan)」に立って見逃すことは、責められるような職務放棄には当たらない。規則通りに取り締まり、厳しい刑罰を与えるばかりが正しいとは限らない。このような「わかっている」対応を示すと、「こちらは要求してはいないのに」、「ねずみたち」からは一定の金額と品物が「勝手に」届けられる。現地の軍と警察にこのような解釈を可能にし、彼らの行為に正当性を与えているのが、「ねずみたち」の宣言なのである。

経済的な利害を前にして、「ねずみたち」はその正当性を担保するために「国家への忠誠」を語る。それは「抵抗するつもりはない」「損害を与えるものではない」という否定の形で、決まり文句のように語られる。その言葉はたしかに月並みではあるが、特定の行為に正当性を与え、それを行うことを可能にするための決定的な意味をもつ。僻地の国境における密輸の現場で、革命後の熱気を既に失ったインドネシアのナショナリズムが、こうして浮かび上がるのである。

おわりに——新しい「始まりの場所」

オエクシは、東ティモールにとって歴史的な「始まりの場所」であるものの、18世紀以降は辺境の「終わりの場所」であり続けてきた。そのオエクシに接しているインドネシア側の村は、インドネシアの統治と経済にとって辺境にある「終わりの場所」だった。しかし東ティモール

18) 近年公開されて世界的に話題となったドキュメンタリー映画『アクト・オブ・キリング』(ジョシュア・オッペンハイマー監督、2012年)は、この問題に切り込んでいる。

の独立によって、この辺境は2つの国家の異なる政治と経済が接する境界の場所に変わり、住民たちに新たな未来をもたらさう「始まりの場所」に変わった。

「ねずみたち」は、その正当性を訴える際に、「自分たちのような貧しい農民が、生活のためにいくばくかのお金を稼いでいるだけだ。厳しく取り締まらねばならない理由はないし、いじめないでほしい」というスタンスで語る。とはいえ、1999年に東ティモールの独立が決定して以来、国境への検問所へとつづく道路沿いの風景と村人たちの暮らしぶりは明らかに変わった。

インドネシア側の村では、道沿いにかつて並んでいた木造家屋は、コンクリートの壁、タイルの床、トタンの屋根を備えた新しい家に建て変わった。家の前の駐車場に自家用車を止めている家もある。子どもに、大学などのより高い教育を受けさせる家庭も増えた。検問所のすぐ手前には、国境の出現以後にもっとも成功したと誰もが認めている女性が、町の中にあつたとしても十分に立派な部類に入る規模の商店を構え、幅広い商品を扱っている。独立が決まった当時、彼女はオエクシから移り住んだ「避難民」だった¹⁹⁾。当時は、ケファの町で腕時計や香水を仕入れて、衣服の中に隠して運び、国境を警備する多国籍軍の兵士に売って稼いだという。多国籍軍が去った後はねずみの道を使った密輸で稼ぎ、やがて今の場所に土地と家を購入し、新しく店舗を増築した。現在の彼女は輸出業者の正式な資格を取得しており、店内の壁には額に入った資格証明書が掲げられている。彼女はトヨタの新車のピックアップと、大型トラック2台を使い、国境で正規の手続きを済ませたうえで、オエクシの得意先へ大量の商品を卸しに出かけていく。ジャワ島の大学で医療を勉強している娘が、将来はこの場所に診療所を開くことが希望だと語った。

ねずみの道が出現したときから、境界近くに暮らす村人たちは、男性と女性、大人と子ども、元からの住民と避難民とを問わず、それぞれのやり方で、新しく可能になった経済活動に加わっていった。国境の出現から10年以上が経過した今日では、それぞれがそれぞれの現在を手に行っている。かつてはガソリンやアルコール飲料を細々と運んでいたという女性は、現在ではねずみの道が「開かれる」たびに、複数の運び手を雇ってドラム缶数本分の燃料を運び出している。運び手として雇われる者のうち、ある壮年の男性は、80リットル近くのガソリンを一度に担いで、国境までの往復を繰り返して運び賃を稼ぐ。10歳前後の少年も、両手に持てるだけのポリタンクを提げて夜の道を歩き、運び賃を得て家計を助ける。古くからの運び手たちには、キオスクを構えて両替商を始めた者もあるし、現在に至るまで生活に特に変わった様子が見られない者もある。資本、商才、体力、親族や知人のネットワークなど、自分が準備できるものと自分に備わったものを使いながら、それぞれがそれぞれの姿でねずみの道を行き来してい

19) 東ティモール独立前後に発生した難民の問題についての人類学者による議論として辰巳 [2007] を参照。ティモールの難民問題の文脈では、難民の帰還がすなわち問題の解決とはならないことに注意が必要である。

る。「オエクシで流通している生活用品は、すべてケファから入ったものだ」と語られるような物流が、こうして生まれ、維持されている。

オエクシは、東ティモールの「始まりの場所」でありながら、「終わりの場所」の地位に甘んじてきた。東ティモールの独立によってオエクシを囲む国境線が出現すると、そこは住民たちに新たな未来をもたらさう「始まりの場所」になった。現在のオエクシには、新たな「始まり」の気配がさらに漂っている。先に述べたように、オエクシは東ティモールの経済特区構想の舞台となっている。プロジェクトの進展によっては、東ティモール国内におけるオエクシの存在感は大きく変わることになる。特区構想が実現するならば、オエクシは東ティモール経済の中樞になるかもしれない。そのときここは、もはや周辺の僻地でなくなり、国家による十分な関心と統治が行き渡る場所となるだろう。インドネシアと東ティモールという国家規模の関係においてこの場所が持つ意味合いは大きく変わり、ねずみの道の人と物の流れも今とは違ったものになるだろう。

「ねずみたち」は自身の現在の生活について、「国境近くの生活とはこういうものだろう」と事もなげに語る。何人かは「こうした状況は今だけで、いつまでもこのまま続くわけがない」と語っている。

謝 辞

この論文は、科学研究費補助金基盤研究 B「東ティモールのナショナリズムの人類学的研究：想像される国家と想像される言語」（研究代表者：中川敏）による成果の一部である。研究会のメンバーならびに調査に協力してくれた方々に感謝します。

参 考 文 献

[英語文献]

Anderson, Benedict

1993 *Imagining East Timor*, *Arena Magazine* 4: 24-25.

Gunn, Geoffrey C.

2015 *East Timor - Indonesia: Oecusse District*, In *Border Disputes: A Global Encyclopedia*, edited by Brunet-Jailly, Emmanuel, pp. 175-185, Santa Barbara: ABC-Clio.

International Crisis Group

2010 *Timor-Leste: Oecusse and the Indonesian Border*, *Policy Briefing: Asia Briefing*, 104: 1-17.

Kym Holthouse and Damian Grenfell

2008 *Social and Economic Development in Oecusse, Timor-Leste*, Oxfam Australia and the Globalism Institute, RMIT University.
(<http://mams.rmit.edu.au/f6qs47gbumu3.pdf>)

McWilliam, Andrew

2005 Haumeni? Not Many: Renewed Plunder and Mismanagement in the Timorese Sandalwood Industry, *Modern Asian Studies* 39(2): 285-320.

Molnar, Andrea Katalin

2011 *Timor Leste: Politics, History, and Culture*, London; New York: Routledge.

Schulte-Nordholt, H.G

1971 *The Political System of the Atoni of Timor*, The Hague: Martinus Nijhoff.

[日本語文献]

アンダーソン, ベネディクト

1997 『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』白石さや・白石隆(訳), 東京: NTT出版.

石川登

2008 『境界の社会史——国家が所有を宣言するとき』京都: 京都大学学術出版会.

ギアーツ, クリフォード

1987 『文化の解釈学 II』吉田禎吾・柳川啓一・中牧弘允・板橋作美(訳), 東京: 岩波現代選書.

松野明久

2002 『東ティモール独立史』東京: 早稲田大学出版部.

辰巳慎太郎

2007 「略奪婚——ティモール南テトウン社会における暴力と和解に関する一考察」『文化人類学』72(1): 44-67.

[参考資料]

Timor Island languages

“Maps Online”, CartoGIS, College of Asia and the Pacific, The Australian National University. Accessed on March 1, 2016.

<http://asiapacific.anu.edu.au/mapsonline/base-maps/timor-island-languages>
detikNews

2015年8月26日 Jokowi: Ada Dua Titik Perbatasan Darat RI-Timor Leste yang Belum

Selesai (「ジョコウィ大統領：東ティモールとの陸上の国境で、2つの地点が未解決」),
2015年11月30日アクセス.

<http://news.detik.com/berita/3001724/jokowi-ada-dua-titik-perbatasan-darat-ri-tim-or-leste-yang-belum-selesai>

POS KUPANG

2012年12月23日 Tahun 2013, Gaji Polisi di Perbatasan Naik 75 Persen (「2013年,
国境の警察官の給与は75%上昇へ」), 2015年11月30日アクセス.

<http://kupang.tribunnews.com/2012/12/23/tahun-2013-gaji-polisi-di-perbatasan-naik-75-persen>

Special Economic Zone in Oecusse

2014年7月11日 La'o Hamutuk, 2015年11月30日アクセス.

<http://www.laohamutuk.org/econ/Oecussi/ZEESMIndex.htm>